
優夜と花

杏

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優夜と花

【Nコード】

N8934T

【作者名】

杏

【あらすじ】

ちよつと不良少年な高岡優夜と、突然優夜たかおか ゆうやの家に住むことになった、ちよつと言葉遣いまづりが変な従兄妹はなと、優夜の愉快な仲間達による日常の物語。1話2000文字以内（例外アリ）なのでさ
らつと読みたいときにどうぞ。基本的にシリアスやストレスと相殺するために書くので、これが更新されている時は疲れてるんだな
ーと思ってください。

登場人物紹介

たかおかゆうや
高岡優夜

16歳、ちよつと不良な高校1年。

両親ともに共働きで、海外を飛び回っているので家で人暮らしをしていた、花が来るまでは――。

『不変』という言葉が一番好きな少年。

一人称は「俺」

初登場：変わった日常

まつりはな
末莉花

10歳、どこにでもい——ないかもしれない小学4年生。

ある日、優夜が学校から帰ってきたら玄関で待ち構えていた女の子。優夜の父親が言うには、優夜の従兄弟らしい。

基本的に天然系ではわほわとしていて何を考えているのか分からないが、電波ではない。

優夜やその友人や街に出ることで表情が豊かになっていく。

どこから仕入れたのか、変な知識ばかり持っている。

「んー？」が口癖。

一人称は「花」

初登場：変わった日常

やまもとたつや
山本達哉

16歳、優夜の悪友の一人。

少し軟派で酒も煙草もやるが、チャラチャラしすぎているわけでも

なく、良くも悪くも今時の高校生。
一人称は「オレ」

初登場：学校での会話とお留守番の花

あしだかずと
疋田和人

16歳、優夜の悪友の一人。
山本と違って酒も煙草もやらない、少しだけお堅い高校生。
一人称は「おれ」

初登場：カードゲーム対決しよう

1・変わる日常

「じゃーなー、高岡」

「おう、またな！」

家の前でダチと別れて、手に持った鍵で家の鍵を開ける。
やっぱ、あいつらとの何気ない会話が一番だなーっと。

「ただいまー」

親父もお袋も俺に家を預けたまま、仕事で海外を飛びまわってる。
だから、ここに住んでいるのは俺一人だけのはず――

「おかえりなさい」

――だった。

「……え？」

お、俺の目の前に女の子が立ってる！？

「お、落ちて着け俺！ きっと幻覚を見てるんだ！ 頬っぺたをつねれば――イテテー！」

普通にいてえぞオイ……。

「んー？ なにしてるんですか、優夜？」

おいおい、このお嬢ちゃん何故か知らんが俺の名前まで知ってるよ。

「はっ！ そうか！ これが今流行りのロリドロローゴ……じゃなくってロリ泥棒かつー！」

ドロローゴってなんだよ、MTGじゃねえんだから……。

「花はドロボウさんなんかじゃありません。はい」

「ん？ 紙か？」

女の子が差し出してきた手紙を受け取る。

数字とハイフンが書かれた紙……これは、携帯電話の番号か？
にしては、少し変な気もするが。

「ちゃんとした番号ですから安心してください。かけたら次の月に

海外からばく大なせい求書が届く——なんてことはないですよ?」

「なんで疑問形なんだよ……」

Q2 かよ、懐かしすぎるぞ。

というか、本当に女の子……だよな?

「ぴっぽっぽと」

携帯電話に番号を打ち込んで発信ボタンを押す。

幸い相手はすぐに出てくれた。

『アローアロー?』

ん? この声は——

「もしかして……親父か!？」

『ん? ああ、優夜か? 久しぶりだなー。元気かー?』

ホント久しぶりデスネー、元気デスヨー、ってか2年ぶりじゃね

?

まあ、それは置いてこう。

「元気だよ。それより、なんか帰ってきたら俺の家に女の子がいるんだけど!？」

俺は、この女の子が親父とは何の関係もないことを祈った。

だが、どうやら俺の祈りは届かなかったようだ。

『おつ、その様子だとどうやら着いたみたいだな』

……オーケー、ファッキンクライスト。

あとで教科書に載ってる顔に落書きしてやる。

「親父の知り合いなのかよ!？」

『何いってんだ。花とお前は従兄妹同士だろうが。前に言っただろ?』

「そんなの聞いたこともねえよ!！」

『そりゃそうだ。今言っただけからな』

このクソ親父……!!

「んで、この子どうすんだよ!！」

『どうすんだって……一緒に住めばいいだろうが。花は事情があつて前の家には帰れねえんだよ。それとも、追い出すのか?』

あー、そのテの事情ですか。

ワケありじゃ仕方ありませんねえー。

……弱いなあ、俺。

「分かったよ、親父」

『ああ、当分の間一緒に暮らしてろ。ああ、それと——』
「？」

『花とお前は本当に従兄妹同士だからな？ だからといって若気の至りで手エ出すんじゃないぞ？』

「出すかボケ！！」

全く、こんなガキに手出すほど飢えてねえっての！

とりあえず、この女の子が泥棒じゃないことだけは分かったので改めて向き合おう。

「？」

「あー、とりあえずアンタと俺が従兄妹同士だということは分かった」

「んー？ 花はアンタって名前じゃありません。花は花です」

「……あー、花ね。フルネームは何なんだ？」

「まつり はな末莉花です」

「末莉花、ね。もう知ってると思うが、俺はたかおかゆうや高岡優夜、とりあえずよろしくな」

「はい。ふつつか者ですがよろしくお願いします、優夜」

「……」

誰だ！ 花にもの教えた奴は！？ ちょっと表出る！！

「ちよつと聞かせてくれ、それ誰から教わったんだ？」

「んー？ 優夜のお父さんから教わりました。あと、優夜のことを優夜と呼べって言ったのもお父さんです」

「……予想通りの答えをありがとう」

オーケー、親父。

後でアルバムの写真に落書きしてやる。

「それで、優夜」

まあ、呼び方くらい好きにさせとくか。

「ん？　なんだ？」

「その……花はおながすきました」

「お腹すいた？」

「はい……」

その言葉通り、花のお腹からくうーと可愛らしい音が聞こえてきた。

恥ずかしいのか、花は顔を赤くして俯いてしまった。

「じゃあ、着替えてから一緒にコンビ二行くか」

「コンビニに、ってなんですか？」

顔を上げて、首を傾げながら聞いてくる花。

コンビ二知らないのか……珍すぎるぞ。

「24時間やってるスーパーみたいなものさ。スーパーよりは小さいけどな」

「んー？　そうなんですか？」

「ああ、着替えてくるからリビングで待ってな」

「はい、優夜も早くきがえてきてください」

「はいはい」

花の偉そうな言葉に苦笑しながら、二階の自分の部屋へ行く。

突然、俺の家で一緒に住むことになった従兄妹？の花。

こうして、俺が望んでいた『不変』は終わったのだった。

1・変わる日常（後書き）

あらずじにあるとおり、シリアスやストレスと相殺するために書き始めたものです。

ほのぼのとしながら読んでくれたら嬉しいです。

2・コンビニに行こう

「そういえば、花は今幾つなんだ？」

「んー？ 年ですか？ 花は……ひーふーみー……の10さいです」
その数え方はババくさいが小4か。

学校云々は……聞いちゃいけないんだろうな。

「優夜優夜ー」

「ん？ なんだ？」

花が袖を引いてくるので、一旦立ち止まってやる。

「コンビニに？ って、ここから近いんですか？」

なんか発音が変だぞ……。

「コンビにじゃなくてコンビニだ。歩いて5分ってとこだな」

「んー？ コンビニ……ですか？」

「そそ」

歩こうとした途端に、花のお腹が再び可愛く音を立てた。

「……お腹すきました」

「もっ少しだから、頑張ろうな……」

「はい……」

上目遣いで見られても、俺は食べ物なんか持ってないしどうしようもない。

ときどき、音を立てるお腹を押さえながら歩く花と歩いていると、派手なデザインの建物が見えてきた。

「ここがコンビニだ。近いだろ？」

「……花はつかれました、お腹すきました」
体力ないお子さまだな。

ま、明らかに身長も体重も足りてないし、仕方ねえか。

「中に入るぞ」

「はい」

花を連れてコンビニの中に入る。

ふう、外はそれなりに暑いから冷房が気持ちいいな。

「わ、中はすずしいです」

「こういう店は冷房完備だからな」

俺の家も冷房完備だから普通に言ってる。

なんせ、全ての部屋に冷暖房完備だからな……無駄に贅沢だ。

「花？ 行くぞー？」

「んー？」

花は冷房が気に入ったのか、暫くの間そこから動かなかった。

そのうち、俺がいないことに気づいたのか、キョロキョロと辺りを見回して俺の姿を見つけて、とてとてと歩いてきた。

「ふう、すずしかったです」

「ははは、外は暑かったからなあ」

「はい。優夜、これかってもいいですか？」

花が持ってきたのはお菓子の入った小さい箱。

中にフィギュアやらカードが入ってる、食玩というものだった。

「……食玩はダメです」

「えー」

というか、その食玩……食べ物かガムだぞ？

腹の足しならねえだろうが……。

「お腹すいてるなら、普通のお菓子にしろよ」

「分かりました……」

しゅん、として食玩の箱を元の場所に置いて、花は普通のスナック菓子の袋を持ってくる。

普通のポテトチップスだ、これならメシ前に少しつまむ分には問題ないだろう。

ついでだし、メシも買ってくるか。

俺は自分用に三色鶏弁当、二人で食べる分のおにぎり3個をかこ

に入れた。

飲み物は……まだ家にあるはずだからいいか。

「花ー？」

隣にいない花を呼んだが、花はさっきの食玩を見つめたまま、その場から動いてなかった。

「……仕方ねえな。ほら」

「あ……」

俺は、その食玩の箱を取ってかごにいれてやる。

「1個だけだからな？」

「あ、ありがとうございます……優夜」

しかし……『日本の家屋コレクション』って、趣味が渋すぎるぞコイツ……。

支払いを済ませて、店を出る。

「やつぱりあついです……」

「ああ、あちいな……」

日は傾いているが、暑さが収まったとは言えない。

太陽に「テーマコンニャロー！」とでも言いたい気分だ。

「もぐもぐ、おいしいです」

花は早速ポテチの袋を開けて食べている。

「花、ポテチはいいけどな。食玩の箱は帰ってから開けるよ？」

「う……」

絶対、今開けようとしてたなコイツ……。

「優夜はいじわるです……もぐもぐ」

「意地悪ってな……こんなトコで開けても組み立てられねえだろ？」

「んー？ 気合でなんとかします」

「大人しく、家帰ってから開けてくれ……」

「？ 優夜がそこまで言うなら、しかたありませんね」

「……オイ。なんで、俺が溜息つかれにやなんだ！？」

「んー？ 優夜は少しうるさいです、近所迷わくです、早く行きましょう」

「あー、もう好きにしてくれ……」

何故だかすごく嬉しそうにポテチを食べながら歩く、自称10歳の花と家に帰る。

不変の日常は終わってしまったが、これから始まる、変わった日常を少し楽しみにしている俺もまた、ここにいることに気づいた。

3・おゆはんです

「優夜、あれはなんですか？」

花が取っ手のついた黒い箱を指差す。

「ああ、これか？　これは電子レンジといって、食い物を温めたりする機械だ」

「んー？　生卵を温めてかんたんにくで卵が作れるっていうあれですか？」

「やるなよ？　絶対にやるなよ！？」

「んー？」

花は分かっているように首を傾げたが、卵爆弾とかマジでシャレにならんからな！

ダチが遊びに来たときにやらかされて、おまけに片付けたのは俺一人という……なんとも素敵なマネをしてくれやがりました。

まあ、ソイツは後でフルボッコにしたけどな。

「あ、包丁があります」

「そりゃ、普通の家だからな。包丁くらいあるさ」

「んー……」

「ん？　どした？」

「つかう、ほうちょう、セルフ――」

「それやったらマジで死ぬからな？」

シャドウ。イトかよ……コイツの知識元、絶対にテレビじゃなくてネットだろ！？

「とりあえず、メシを温めるか」

「んー？　じー」

花が興味津々に見つめたので、俺は使い方を教えてやった。

「食い物を入れたら、ここの『あたため』ボタンを押すんだ。弁当

やおにぎりなら大体30秒くらいだな。あまり長くやりすぎるとあつくなるから気をつけるよ？ ここの『取り消し』ボタンを押せば止まる」

「むむむ……」

「何がむむむだ。ああ、後レンジに掛けちゃいけないモンもあるかな？ 注意書きをよく読んでから使えよ？」

「はい、わかりました」

さて、メシも温め終わつたし食べるとするか――。

「今日の夕飯は――」

「コンビニのお弁当とおにぎりです。味気ない夕ご飯ですね」

「うるさい。いつもなら自分で作るんだが、今日は花に会って少し疲れてたんだよ……」

コンビニで夕飯を買うと割高なんで、普段は自炊をしている。

腕前のほうは、可もなく不可もなくといったところだ。

「ま、食べようぜ。花はどのおにぎりにするんだ？ と、いつでも3つしかないけどな」

「んーと……じゃあ、ツナマヨとこんぶで」

「はいよ」

注文どおり、ツナマヨと昆布のおにぎりを花の側に置いてやる。

花はおにぎりを手に持って、転がしたり逆さまにしてみたりしている。

もしかして、食べ方知らないのか……？

「優夜、これはどうやって食べるんですか？ 花は食べ方知りません」

マジでした。

まあ、コンビニ知らなかったくらいだし、おにぎりも食べたことなかったんだろうな。

「三角の一番上に？ って書かれた線があるだろ？ それを最後まで引いてから左右の透明なのを外すんだ」

「んー？ けっこうむずかしいです……」

「はは、こんなのすぐに慣れるさ」

おにぎり相手に苦戦する花を見ながら、俺も三色鶏弁当を食べる。やり方を覚えたのか、フィルムを外すのに成功した花はおにぎりを頬張って笑顔を見せた。

「もぐもぐ……おいしいです」

「そうか。遠慮しないでいっぱい食べるよ？」

「はい、もぐもぐ」

あっという間に1つ食べ終わって、今度は昆布おにぎりを手に取る花。

慣れたんだろう、今度はとまどうこともなくフィルムからおにぎりを取り出すことに成功したようだ。

「もぐもぐ……こんぶもおいしいです。優夜は、どのおにぎりが一番好きですか？」

「うーん、そうだなあ。和風ツナマヨかチャーシューマヨかな」

「んー？ 花が食べたツナマヨとはちがうんですか？」

「花が食べたツナマヨに醤油を掛けたのが和風ツナマヨなんだよ。

俺はこっちのほうが好きだな」

ちなみに、今回は売り切れていたので買えなかった、くそう……。

「じー」

「ん？ なんだ？」

昆布も食べ終わった花が、俺が食べている弁当を見ている。

「もしかして、食べたいのか？」

俺が聞くと、花はこくりと小さく頷いた。

まあ、まだ半分残ってるがいいか、というか意外と食べる奴だったんだな……。

弁当の残りと使っていない割りばしを花に渡してやる。

「もぐもぐ……これもおいしいです」

「ま、慌てないでゆっくり食べれ」

楽しそうに弁当を頬張る花を見ながら、俺も自分の分のおにぎり

を食べ――

「ごちそうさまでした」

「――って、はええなオイ!？」

「んー？」

……とりあえず、おにぎりは食べ終わった。

味は分からなかったが……。

「ごちそうさま。って、花……ほっぺたに飯粒ついてるぞ?」

「え? どこですか?」

「左のほっぺたの口の近く」

花VS飯粒。

こういうのって、自分では取れないんだよなあ。

「取ってやるから。じつとしてろ」

ティツシュで花の左頬からご飯粒を取ってやる。

「これでいいぞ」

「あ、ありがとうございます……優夜」

花は少し頬を赤くしているが、どうみても小4の行動じゃないぞ

……可愛いが。

「おませさんめ」

「え、何か言いましたか?」

「なんでもないさ。俺はこの後自分の部屋行くけど、花はどうするんだ?」

「んー? 優夜は部屋でなにをするんですか? まさか――」

「ちげえ!! 今日宿題もないし、動画を観るんだよ」

何を想像したんだ! 何を!?

「あ、花もみたいです」

「そか。じゃあ、さっさと片付けて行こうか」

「はい、優夜」

さて、今日は何の動画を観るか。

考えながら俺は花と、自分の部屋に向かうのだった。

3 おゆはんです（後書き）

「ざんねん！！ 優夜のぼうけんはここでおわってしまいました！
」！

「そもそも最初から冒険なんざしてねえから！！」

4・動画をみよう

「優夜優夜」

「どした、花？」

「『れつつごーびっち』ってどういう意味なんですか？」

「ちょうどいい椅子がないから、仕方なく俺の膝の上にさせてる花がとんでもないことを聞いてきた。」

「れつつごーびっち……レッツゴービッチね……て、コラ！ そんな言葉どこで覚えた!？」

「んー？ さつき、サングラスにたばこの人が言っていましたよ？」

「ああ……そういえばこれ、そういうヤツだったな」

「誰だ!？ 花にG T A 動画なんか観せてるのは!？」

「俺だよ!!」

「てか、なんで俺は花とG T A 動画なんか観てんだ!？」

「それでー、どういう意味なんですか？」

「膝の上の花が顔をこっちに向けて、興味津々に聞いてくる。」

「あー、これはな？ うーむ……なんと説明すればいいかねえ……」

「本当のこと言うわけにもいかんし、参ったな……。」

「んー？」

「あれだ、『行くぞ、女』って意味なんだよ」

「とりあえず、無難に言っておこう。」

「でも、この人たち男の人ですよね？」

「海外のゲームだからな、スラングの意味で使われてるんじゃないかねえか？」

「まあ、間違いではないだろう。」

「すらんぐ？ よく分かりませんが、おぼえておきます」

「なあ、花。違うの観るか？」

「んー？ どうしてですか？」

「いや……面白くないじゃないかと思つてな」

というより、花の精神衛生上良くない気がするんだが……。

俺はもつと健全な動画を探そうとしたが、

「そんなことないですよ？ おもしろいです」

「そか。まあ、花が面白いならいいんだ」

花が楽しそうな顔をしているので、このまま観ることにする。

「はい。あ、優夜」

「ん？」

「『まざーふあつかー』ってどういう意味なんですか？」

今度はソレですか、花さん……。

どうするか、本当のことは言えないしなあ……。

「……スラングだと『くそつたれ！』とかって意味だな」

今回も無難に済まそうと思ったが、今回は向こうが一枚上手だっ

たようだ……。

「……じゃあ、本当の意味では？」

「……花にはまだ早い」

こう言つとくしかないよな…… * * * * *なんて言えるわけねえし。

「えー」

「もう少し大きくなつたら、な？」

「分かりました……」

「よしよし、いい子だ」

褒美に頭をなでてやる、うりうりー。

「く、くすぐりたいです、優夜……」

「ははは」

「むー……」

俺の態度が気に入らないのか、花は少し怒つたような顔で俺を見ている。

……逆に、可愛くなつたな。

「あ、花。ジュースまだ飲むか？」

「飲みます」

花を持ち上げて、椅子に座らせてやる。

「よし、注いでくるからこっちの動画観てな」
「はい」

新しい動画を気に入ったらしい、花は食い入るように画面を見ている。

ジュースも用意したし、今のうちにフロ沸かすとしますか……。

4・動画をみよう（後書き）

「そんな長さで大丈夫ですか？」
「大丈夫だ、問題ない（多分）」

5 お風呂にはいつて寝ましょう

「花」。フロ沸いたけど入るかー？」

「はい、入ります」

「おう、ゆっくり入ってこいー」

「……じー」

なぜか、俺のほうを見つめたまま動かない花。

「ん？ 何か足りないモノあったか？」

「優夜」

……なんか、嫌な予感がするぞ？

「なんだ？」

「優夜もいつしよに入りましたよ」

「やっぱりきた！？」

いきなり、何のたまいやがりますか、この幼女は！？

「なっ！？」 何言ってやがる。もう十分、一人で入れる年だろ！？」

「花は一人で入るお風呂はきらいです。だから、優夜もいつしよに入りましたよ」

出会ってまだ1日も経ってないが、ひとつだけ分かったことがある。

それは、コイツが意外と頑固だってことだ。

「——しゃあねえなあ」

まあ、父親が娘をフロに入れるようなもんだし、大丈夫だろ。

そう思っ、俺は花と脱衣所に向かった。

「なあ、花」

「なんですか？」

「お前って……よく食べる割には細すぎねえか？」

「~~~~！ 花も気にしてるんです。あまり言わないでください」

花は顔を赤くしながら、少し怒ったような口調で言ってきた。

花にしては珍しく感情を出してるな。

「はいはい」

「むうー！」

「髪洗ってやるから、そんなにむくれんなよ」

「……ていねいをお願いしますね？」

「おう、任せとけ」

軽く体を洗って、花を抱えて湯船に入る。

「はあー、あったかくて気持ちいいです」

「だな」

フロの気持ち良さは、何物にも例えがたいものだと思つ。

十分温まってから洗い場に花を座らせる。

「それじゃ優夜、花のかみを洗ってください」

「おう。シャンプーハットはいらないのか？」

俺はからかうように言ってやった。

「花にはそんなもの必要ありません」

「ほいよ」

わしゃわしゃ……

「お客様、痒いところは御座いませんか？」

気分的に、床屋のような口調で花に聞いてみる。

「ないです」

「それじゃ、流しますねー」

「ざばあっ——」

十分洗い流してからトリートメントもつけて再度、

「ざばあっ——」

「よし、終わったぞー」

「ありがとうございます。こんどは、花が優夜のせなかを洗ってあげます」

「お、ありがとな。までに頼むな」

「……まで？」

「おっと、つい方言が出てしまった。『ていねいに』ってことだ」

「はい、わかりました」

スポンジを持った花が、俺の背中を一生懸命こする。

……撫でられてるようにしか思えんぞ。

「花ー、もう少し力入れていいぞー？」

「んー？ このくらいですか？ ごしごし……」

おおう、今度はいい感じに力入ってるな。

「ああ、いい感じだ。上手いな」

「ありがとうございます。じゃあ、ついでに前も——」

「までこらっ！ そっちは自分でやるからいいってのー！」

花が前に回り込もうとするが断固阻止！

これはそういうお話じゃありません！！

「えー？」

「えー、じゃない！！」

「えー？」

「微妙に違うが、えーでもない！！」

微妙な言い合いに少し疲れた気がするが、歯磨きをして花を抱えて再び湯船に入る。

「50数えたら上がるうなー」

「はい、やっぱりお風呂は気持ちいいですー」

「だなあー」

最高だね、極楽極楽——。

「はあー、さっぱりしました」

鏡台の前に座りながら、パジャマ姿の花。

着替えの類は、親父に持たされたカバンの中に全部入ってるらしい。

「花は普段どんな髪型にしてるんだ？」

「んー？ 花はあまり髪をいじりません」

このくらい長いと色々できそうなんだが、少しもったいないな……。

「んじゃ、普通に乾かすだけでいいんだなー？」

「はい、それでいいです」

ドライヤーで花の髪を乾かす。

普段の自分と髪と違って、肩より長い髪に苦戦したが、まんべんなく乾かし終わった。

「終わったぞ」

「ありがとうございます。優夜はかわかすのがおじょうずですね」

「んなことねえよ。毎日やってりゃ誰だって上手くなるさ。さ、そろそろ寝ようぜ。花はそっちのベッドな」

俺が指差したベッド（ダチが泊まりに来た時のための簡易ベッドだ）を見て、花は少し寂しそうな顔をしたが、2人で寝るにはちょっと狭いベッドだから仕方ない。

「はい……おやすみなさい、優夜」

「ああ、おやすみ、花」

俺は、花がベッドに入ったのを確認してから部屋の電気を消した。

「んう……ねむれません」

とてとて……ごそごそ……

「やっぱり、ここがいいです。おやすみなさい……すうすう」

5 お風呂にはいつて寝ましょう（後書き）

はい、1日が終わりました。

もう分かったと思いますが、この物語は作者の趣味が満載です。

これからもうこういう感じで書いていこうと思うので、分からない言葉も出てくるかもしれませんが、続きも読んでいただければ嬉しいです。

6・学校での会話とお留守番の花（前書き）

この話から10までマジック・ザ・ギャザリング関連の単語が多く出てきます。

MTGを知らない方は「あ、カードゲームかー」くらいに思いながらお読みになるか、苦手な方はお戻りください。

6・学校での会話とお留守番の花

「高岡、今いいか？」

——今は授業の間の休み時間、机に突っ伏してたらクラスメイトが話しかけてきた。

「ああ、山本か。なんだ？」

……ねみい。

コイツは山本達哉^{やまもと たつや}、俺のダチでカードゲーム仲間ってところだ。

「お前……いつも眠そうだな。夜更かしでもしてんのか？」

山本の奴が呆れたように聞いてくる。

「そんなつもりはないんだが……体質的な問題かねえ」

昨日も早めに寝たし、寝不足ってことはないだろう。

まあ、起きたら花が俺のベッドに潜り込んでたのにはビックリしたが……。

「まあいいや。明日学校休みだろ？」

「？ ああ……」

確か、明日は祝日だったな。

当然、学校も休みだぜヒヤッハー！！

あまりの嬉しさに世紀末モヒカン集団の真似をする俺。

「疋田が、久々にデュエルやらねえ？ って言ってたわ。んで、お前ン家空いてね？」

「俺ン家かー。空いてなくもねえんだが……」

今、花がいるしなー。

どうしたものかねえ……。

「ん？ 誰か来てんのか？」

「まあな。今、従兄妹が来てんだわ」

「従兄妹か」

まあ、まだガキだしオーケーということにしておこう。
何がオーケーかは分からないけどな！

「ま、大丈夫だろ？ いいぜ、スタンか？ エクテンか？」

「エクテンでやるうぜ。スタンだと面白くねえし」

「オーケー、明日までにデッキ調整しておくわ。今度は負けねえかなー！」

「フツ、またフルボッコにしてやんよ！」

「ほざいてる。それにしても、疋田の奴が主催なんて珍しいな」
普通、こういった誘いごとは山本がしてくることが多い。

疋田は少し硬いところがあるからなあ……。

「ああ、なんでも新しくデッキ作っただってよ」

「ほう？ 今度はなんだ？ カウンター・オースでも作ったか？」

「いや……チラツと見たが『トレイリアのアカデミー』が——」

「おい！ それ禁止カードだろ！？」

しかも、アカデミーが入るってことは99%M o M aだろうが！？

俺あ、そんなクソデッキとなんざやりたくねえよ！！

「まあ、疋田には俺から言っとくわ」

「ああ、頼むわ」

とりあえず、家帰ったらデッキの調整するべえ。

この後俺は、今日もダラダラと進む授業を半分だけ聞いていた。

——一方その頃、優夜の家では。

「花はひまです……」

優夜は学校に行ってしまったし、テレビも面白いのやってません。

お外はまだよく分からなくて少しこわいので、お家の中で遊ばないといけないのですが、なにをしましょうか……。

「んー？ そうだ、優夜のお部屋をたんけんしましょう」

はい、そうと決めたらすぐ行きましょう。

よいしょよいしょと階段を上がって優夜のお部屋に行きます。

「おじゃまします」

やっぱり、優夜のお部屋は広いです。

リビングと同じくらいの高さがあります、ほかの人の部屋とくらべてもかなり広いんじゃないでしょうか？

「さて、どこからさがしましょうか」

そういえば、男の人のベッドの下にはその……いかがわしい本がかくされている、と聞いたような気がします。

では、さっそくベッドの下をさがしてみましょう。

「ごそごそ、ごそごそ……」

んー、さんねんながらいかわしい本はありませんでした。

次は、どこをさがしましょうか。

「あ、そろそろお昼ですね」

お昼ごはんの時間なので、たんけんはここまでです。

優夜が「昼飯は、コンビニで買っておいたパンを食ってくれ」と言っていましたので、リビングで食べることにしましょう。

食べ終わったら、優夜のお部屋のパソコンの中にある『えみゆ』

というもので遊びましょう（遊び方は優夜から聞いておいたのではありません）

「ただいまー」

「あ、優夜。おかえりなさい」

とてとてとて……

「おう、ただいま、花」

なでなで……

「優夜、聞いてください」

「ん、どした？」

「さっき、えみゆで『1943』というゲームを初めてやって、の

「こんでいにゅーでクリアできました。花はすごいですか？」
「嘘お！？」

花……恐ろしい子っ！！

6 ・学校での会話とお留守番の花（後書き）

当時のスタン↓5 t hからUDまで

当時のエクテン↓3 r dからUDまで

分からない方はスルーしてOKです。

7・カードゲームで遊ぼう

「優夜、何してるんですか？」

「これか？ 明日ダチ達が遊びに来るからデッキ調整してんの」

花が俺の手元を覗き込んできたので、俺は手に持っていたカードの束を見せてやった。

「でつき？」

「このカードの束のこと。これのことをデッキって言うんだよ」

「なるほど、分かりました」

よし、これで調整はオーケー。

暇になったし、メシの準備まで花と遊ぶか。

「花もやってみるか？ 基本的なルールは今教えてやるよ」

「んー？ 花もやってみたいです」

「よし。じゃ、ちゃんと聞いてるよ？」

「はい」

俺説明中――

「――というわけだ、分かったか？」

「んー、大丈夫だと思います」

「よしよし。それじゃ、少しやってみようか。花はこっち使いな」

「はい、ありがとうございます。花だって簡単には負けませんよ？」

「はっはっは、ヒョッコがよく言うわ！」

「むーっ」

俺と花はデッキを念入りにシャッフルし合った後、お互いに返す準備が整ったのでデッキから、最初の手札としてカードを7枚引く。

む……森1枚か、まあ『野生の犬』、『怨恨』、『巨大化』もあるし、マリガンするほどでもないな。

先攻後攻はコイントスで決める——俺は指でコインを弾いて、落ちてきたコインを手の甲に乗せて隠した。

「さ、どっちだ？」

「んー、裏で」

「よし、裏だな」

オープン——

「残念、表だな。俺の先攻だ」

「はい、では花の後攻で」

「オーケー、マリガンはなしだ」

「花もしません」

「じゃ、始めようか。アンタップ、アップキープ、先攻なんでドロ——はなし。森をプレイして1マナ、野生の犬をプレイしてエンドだ」こいつは、アップキープ時にライフが多いほうに裏切ってしまうが、緑のみでパワー2タフネス1（以降？／？）とかなりコストパフォーマンスに優れている。

サイクリングという能力付きなのも良い点だ。

「花の番ですね。アンタップ、アップキープ、ドローします。平地を出して1マナ出して『サバンナ・ライオン』さんを出します。ターン終了です」

く……出来れば手札にいてほしくなかったんだが、やっぱりやがったか……。

「俺のターンだな。アンタップ、アップキープ、ドロー」

サバンナ・ライオンはバニラ（能力を持ってないクリーチャー・カードのことだ）だが、白のみで2／1、俺の野生の犬と同じだ。

ここは、どうするか——

「森をプレイして、1マナから怨恨をプレイ。野生の犬に付けてアタックだ」

さて、花はどうするかな？

「んー、仕方ないのでライオンさんで防ぎよします」

「じゃ、それにあわせて森1マナから『巨大化』だ。トランブル（

貫通能力のことだ）の分、花に5点のダメージだな」

「うっ……少しいたいです」

こっちの犬は怨恨と巨大化で7/4になってるから、破壊されることはない。

「エンドだ」

「花の番です。アンタップ、アップキープ、ドローします。平地を出して2マナから『白騎士』さんを出してターン終了です」

花がプレイしたのは、2/2で先制攻撃とプロテクション（黒）を持つ白の代表的な小型クリーチャーだ。

先制攻撃を持つてるから、このまま犬で殴っても一方的に破壊されちまうな……。

「俺のターン。アンタップ、アップキープ、ドロー」

引いたのは、『ガイア揺籃の地』か。

「森をプレイして、1マナから『エルフの抒情詩人』をプレイしてエンドだ」

「花の番ですね。アンタップ、アップキープ、ドローします。平地を出して1マナからサバンナ・ライオンさん、さらにもう1マナ出してライオンさんに『ちらつき護法印』を付けます。色はもちろん緑です」

「げっ！」

やべ、詰んだかもしんねえ……。

「白騎士さんで攻撃です」

「通すぜ……」

「花のターンは終了です」

護法印をなんとかしないとこのまま終わるな……。

と、思ったが……護法印自体は抒情詩人で破壊できるんだよな、問題は護法印は手札に戻せるってことだ……。

「俺のターン。アンタップ、アップキープ、ドロー。森1マナからエルフの抒情詩人、ガイア揺籃の地をプレイしてエンドだ」

『カビ』を引けるかどうかだな、きついわ。

「花の番です。アンタップ、アッブキープ、ドローします。平地2マナから『十字軍』を出します。白騎士さんで攻撃です」
「通すぜ」

十字軍で白のクリーチャーは全て+1/+1されるから3点のダメージか、少し痛いな。

「ターン終了です」

「エンド前に森1マナ使って、抒情詩人でちらつき護法印を破壊するぜ」

「むー、平地から1マナ出して護法印さんを手札に戻します」

まあ、当然だな。

手札に戻せただけ、よししよう。

次のターンに、削れるだけ削るしかないな……。

「俺のターンだな。アンタップ、アッブキープ、ドロー。……犬でアタックだ」

「んー、ライオンさんで防ぎよしてみます」

「それじゃ、それにあわせてガイア揺籃の地から2マナ、森からの2マナで『樫の力』だ！」

「う……とらんぷるで9点ですか。すごくいたいです……」

「森1マナから野生の犬をプレイしてエンドだ」

「花の番ですつ。アンタップ、アッブキープ、ドローします。平地1マナからちらつき護法印、色はもちろん緑です。白騎士さんにつけてターン終了です」

「俺のターン。アンタップ、アッブキープ、ドロー……」

く、やるしかないか……。

「ガイア揺籃の地から3マナ、森から1マナ出して『マスティコア』をプレイするぜ」

「む！ それは困るので平地1マナから『剣を鍬に』です。優夜は4点のらいふをげつとですね」

ギヤアアアアムー！

——結果は、俺の負けだった。

白騎士は3体も並べられるわ、重要なクリーチャーは片っ端からソープロされるわ、極め付けはこっちのクリーチャーが足りない状態での『ハルマゲドン』……どうしようもねえっつの！！

まあ、スタン対エクテンだからこんなもんだよな。

つか、花の立ち回り方がどう見ても初心者じゃねえ……。

「楽しかったか？ 花」

「はい、とっても楽しかったです。優夜、もう一度やりましょう」

「ははは、今度は負けねえぞー？」

「のぞむところです。また、こてんこてんにしてあげます」

こうして、俺と花は夕飯の準備までカードゲームを楽しんだのだった。

7・カードゲームで遊ぼう（後書き）

すみません、500文字ほど越えました（汗

緑単ストンパイ（スタンダード）対白単ウイニー（エクステンデッド）でしたが、やっぱりソープロは鬼ですね。

作中のデュエルですが、それぞれデッキリストを作ってリストシャッフルソフトでランダムシャッフルして、手動ですが実際に架空デュエルしながら書いてます。

8・カードゲーム対決しよう

——次の日、山本と疋田は予定通りの時間にやってきた。

「ゆ、優夜……この人たちはだれですか？」

花が少し怯えるように、俺の服の裾を掴む。

「昨日いったら？ 俺のダチの山本と疋田だ。お前ら、花が怯えてんぞ！？」

「ちょ……普通に立ってるだけだろうが！？ なあ、疋田！？」

「そうそう、おれたち何もしてないって。花ちゃんだっけ？ おれは疋田和人、よろしくね」
あしだかずと

「オレは山本達哉、オレら2人とも高岡のダチだよ。よろしくな、花ちゃん」

それedyやく誤解が解けたのか、硬くなっていた花の表情も多少和らいだ。

「……んー？ 花は末莉花っていいます。よろしくおねがいます」

「挨拶も済んだところで早速やろうぜ？ まずは、俺と山本からでいいか？」

「ああ、おれは花ちゃんと見学してるよ」

「オーケー。準備しようぜ、山本」

「おう！」

コイントスの結果——俺が勝って先攻を取った。

「先攻もらうぜ。マリガンはなしだ」

「オレもしない」

「じゃ、始めようぜ。アンタツプ、アップキープ、先攻なんでドロなし。沼をプレイして1マナから『強迫』だ」

「げ……いつものデッキか。ほらよ」

山本の手札はと…… Lightning Bolt（以降稲妻）が2枚あるな……土地は山1枚か、よし――

「火葬を捨ててもらおうか」

「火葬ね……」

山本が自分の墓地に火葬を置く。

「エンドだ」

「オレのターンだな。アンタップ、アップキープ、ドロ―。1マナから『モグの狂信者』でエンド」

1/1だが、倒そうとしても生贄にして1点は確実に飛ばしてくる厄介な奴だ。

かといって、そのまま放置しておくとも1点ずつ削られちゃう……

ここは――

「俺のターン。アンタップ、アップキープ、ドロ―」

『ヨグモスの意志』を引いたが、今は必要ねえな。

「島をプレイして島から1マナ、『呪われた巻物（以降カスコ）』をプレイしてエンドだ」

「む、早々に出てきたな……オレのターン。アンタップ、アップキープ、ドロ―。山をプレイして狂信者でアタックしてエンド」

「通すぜ。エンド前に沼から1マナ、『吸血の教示者』をプレイ」

さて、何を持ってくるか……偏頭痛も拷問の車輪も今はあまり必要ない、となると……これが先だな。

俺は、そのカードをデッキの一番上に置く。

「教示者で2点ロストして俺のターン。アンタップ、アップキープ、ドロ―。『不毛の大地』をプレイしてエンドだ」

「エンド前に、山1マナから稲妻で直火焼きだ」

3点は痛い、Arcane Denial（以降アーケン）を使うほどでもないから通しだな。

「通すぜ、焼きな」

「それでオレのターン。アンタップ、アップキープ、ドロ―。狂信者でアタックしてエンド」

「通すぜ、土地きてねえな。事故ってんのか？」

「さあな」

「ま、俺のターンだな。アンタップ、アップキープ、ドロ―。『U
nderground Sea（以降アングラシー）』をプレイ」

「ほう、いいカード持ってたんじゃないか。いつ手に入れた？」

「この間シヨップいった時にな」

あの時は、思わず狂喜乱舞してしまつて店長に怒られたが、欲しいカードだったんでマジで嬉しかった。

もう片方はカスレアだったが、大した問題じゃない。

「アングラシーから黒1マナ、沼から1マナ出して『Hymn
o Tourach（以降ヒム）』をプレイするぜ！」

「来たか……まあ儀式から初手に使われなかっただけマシだな」

コイツは、相手の手札を2枚無作為に捨てさせるといふ極悪カードで、暗黒の儀式から強迫+ヒムって決まると、最高にハイって奴だ！！

「その前に山1マナから稲妻で焼いとくわ」

山本の手札から落ちたのは、『なだれ乗り』と『ボガーダンの槌
（以降ハンマー）』、てことはあの1枚はボーライか。

「これで俺のターンはエンドだ」

「やっぱヒムは痛えな……オレのターン。アンタップ、アップキ
ープ、ドロ―。山をプレイして3マナから『ボール・ライトニング』
をプレイ――」

「――おっと、ソイツは島から1マナ、不毛の大地から1マナ出し
てアーケンでカウンターさせてもらうぜ」

「チッ、狂信者でアタックしてエンドだ」

「俺のターン。アンタップ、アップキープ――キャントリップで2
枚ドロ―してもいいぜ」

「なら、遠慮なく」

「で、俺も1枚ドロ―して本来のドロ―。沼から1マナ出して『暗
黒の儀式』、3マナで『惑乱の死霊（以降ヒッピー）』をプレイし

てエンドだ」

「オレのターンか。アンタップ、アップキープ、ドロー。山をプレイして狂信者でアタック」

残り9点か……狂信者を飛ばさせておいたほうがいいな。

「対応して3マナからカスコ起動、対象は狂信者でカードはヨーグモスの意志だ」

「お前の手札は1枚だから100%当たるな。その前に狂信者を生贄にして1点ダメージ与えとくわ、でエンド」

「俺のターンだな。アンタップ、アップキープ、ドロー。ヒッピーでアタック」

「対応して山から2マナ、『いかづち』でヒッピーに4点」

「ヒッピーは破壊されて、沼、島、不毛の大地から1マナずつ出して『拷問の車輪』をプレイしてエンドだ」

こつちも微妙に土地こねえな……。

「オレのターン。アンタップ、アップキープに2点ダメージくらってドロー。山1マナから狂信者をプレイしてエンド」

「俺のターン。アンタップ、アップキープ、ドロー。3マナから拷問の車輪をもう一枚プレイしてエンドだ」

「げ、もう一枚追加かよ。オレのターン。アンタップ、アップキープに4点ダメージくらってドロー。流砂をプレイして狂信者でアタックしてエンド」

山本はこれで5マナか……6マナ揃えられる前にライフ削り切らないと負けるな。

「俺のターンだな。アンタップ、アップキープ、ドロー……エンドだ」

やべえ、マジで土地こねえぞ……。

「オレのターンか。オレのターン。アンタップ、アップキープに4点ダメージくらってドロー。狂信者でアタックしてエンド」

「対応して3マナからカスコ起動、対象は狂信者でカードはさっき同じヨーグモスの意志だ」

「生贄で1点飛ばしな」

「おう、俺のターン。アンタップ、アップキープ、ドロー——」

——ここで決めるしかねえ!!

「4マナ出して黒マナ1残しでヨーグモスの意志をプレイするぜ!

」

「——っ!？」

「残った黒1マナで墓地から暗黒の儀式で黒3マナ、うち2マナ使
ってヒムをプレイだ」

「く……」

これで、山本の手札は0になった。

落ちたのは、『Folk』と『ジョークルホープス』……危ねえ。

「残り1マナで吸血の教示者をプレイして2点ロストでエンドだ」

デッキの一番上に持ってきたのは強迫、これで山本に5点以上の
火力カードがなければ俺の勝ちのはずだ。

「……オレのターン、アンタップ、アップキープに6点ダメージく
らってドロー……2点足りねえか。山1マナから稲妻で3点ダメー
ジ、で——投了だ。いいデュエルだったぜ」

——山本とのデュエルは、辛うじて俺が勝利した。

おそらく、一手遅れてたら俺の負けだったんだろうが、今は勝っ
たことを素直に喜ぶことにしよう。

次は、疋田とのデュエルだ——!!

「山本」

「ん？」

「もう終わったことだから言っても仕方ないが、5マナ揃った時点
でハンマー拾ってきてたらお前の勝ちだったよな？」

「……アーツ!!」

8・カードゲーム対決しよう(後書き)

今度は1000字ほどオーバーしました……。例外アリって書いておこう(汗)

というわけで、青黒ハンデスVS赤単バーンでした。

山本のハンマーは明らかにプレイングミスですね、まあ、まだまだ未熟者ということでは。

9・カードゲーム対決しよう・2

「——うし！ 疋田、そろそろやろうぜ？」

「ああ、いいよ。花ちゃんは、今度は山本と遊んでね」

「はい、分かりました。優夜、きのうのデッキかりますね」

「ああ、フルボッコにしてやんな」

「はい」

花のプレイングなら、いい勝負になるだろう……多分な。

コイントスの結果——疋田が勝ち、先攻を取った。

「先攻もらうよ。マリガンはなしだね」

「ああ、俺もナシだ」

「それでは、始めよう。アンタップ、アップキープ、ドローは先攻だからなしだね。『宝石鉱山』をプレイしてカウンター1個取り除いて1マナ、『極楽鳥（以降鳥）』をプレイしてエンドだよ」

宝石鉱山……多色デッキか？

「パーミッション好きのお前が珍しいな」

「ちよつと試してみたいデッキがあつてね。今調整中なんだよ」

これだけじゃ読めないな……早めに潰しておいたほうがよさそうだ。

「そか、俺のターンだな。アンタップ、アップキープ、ドロー。沼をプレイして1マナから暗黒の儀式、2マナ使ってヒムだ」

「初手からきたかー、きついね」

疋田の手札から落ちたのは島2枚。

これは運がいいな、ヤツの勢いを止めれそうだ。

「あちゃ、島2枚とも落ちたか。これは厳しいな」

「残り1マナで吸血の教示者——カードを1枚抜き出してデッキをシャッフル、これを一番上に置いて2点ロストしてエンドだ」

「おれのターンだね。アンタツプ、アツプキープ、ドロー。もう一枚、宝石鉱山をプレイしてエンドだよ」

「やっぱ正田は青主体なのか動きがないな……」

「俺のターン。アンタツプ、アツプキープ、ドロー。『地底の大河』をプレイしてエンドだ」

「エンド前に鳥から青マナを出して『渦巻く知識』をプレイするよ」
3枚ドローしてから2枚を好きな順番でデッキの一番上に置くカードだな。

「そんなモノを入れてるってことはコンボ系のデッキなのかねえ？
」で、おれのターンだね。アンタツプ、アツプキープ、ドロー。『知られざる樂園（以降アンパラ）』をプレイしてエンドだよ」

「これで、正田は4マナ確保か……そろそろ仕掛けてきそうだな。
」俺のターンだな。アンタツプ、アツプキープ、ドロー。沼をプレイして2マナ、地底の大河から無色1マナ出して偏頭痛をプレイするぜ」

「それを通すわけにはいかないな。アンパラ以外からマナ出して、
バイバックなしの『禁止』でカウンターさせてもらうよ」

「くそつ、やっぱりカウンターは入ってるか。エンドだ」

「おれのターンだね。アンタツプ、アツプキープ、ドロー。エンドだよ」

「俺のターンか。アンタツプ、アツプキープ、ドロー……」

「やべえな、今度は土地しかこねえ……」

「島をプレイしてエンドだ」

「エンド前に鳥から白マナを出して『悟りの教示者』をプレイするよ」

エンチャント、アーティファクト用のサーチカード……正田のヤツ、コンボパーツを揃えようとしてるな。

「島と沼から1マナずつ出してアーケンでカウンターだ」

「いいよ、エンドかな？」

「あれ？」

余裕なんだが……もしかして、釣りだったか？

「あ、ああ……」

「じゃ、アンタツプ、アップキープ時キャントリップで2枚引くね」

「俺も1枚ドローするぜ」

「で、本来のドロー。エンドだね」

「俺のターン。アンタツプ、アップキープ、ドロー。沼をプレイして3マナ、拷問の車輪をプレイ——」

「——宝石鉱山からカウンター1個取り除いて3マナ、禁止でカウンターさせてもらうよ。バイバックコストとして手札から2枚捨てるね」

手札から落ちたのは『剣を鍬に』と『伏魔殿』か——って、伏魔殿だと……？

断定は出来ないが、パンデモ系のデッキの可能性が高えな。

「俺のターンはエンドだ」

「おれのターンだね。アンタツプ前にアンパラが手札に戻ってアンタツプ、アップキープ、ドロー。アンパラをプレイして、鳥から緑マナ、もう1枚極楽鳥を出してエンドだよ」

「俺のターンだな。アンタツプ、アップキープ、ドロー……地底の大河をプレイしてエンドだ」

「お互い手が進まないね、アンタツプ、アップキープ、ドロー。エンドだよ」

「俺のターン。アンタツプ、アップキープ、ドロー」

強迫か……一か八か、通るか——

「沼1マナから強迫をプレイだ」

「うーん……通すわけにはいかないね。宝石鉱山以外からマナ出して禁止でカウンター、バイバックはなしで」

「く……通らねえか。エンドだ」

「エンド前に宝石鉱山から黒マナ出して吸血の教示者をプレイするよ。シャッフルして、抜き出したカードを一番上に、最後に2点口ストだね。宝石鉱山はカウンターがなくなったので生贄に」

「ああ」

「では、おれのターン。アンタップ前にアンパラが手札に戻ってアンタップ、アップキープ、ドロー。アンパラをプレイして4マナ、『騙し討ち』をプレイするよ」

「——！！」

伏魔殿はあくまでもサブ……本命はスニークアタックか！！

おそらく手札にアレがあるはず……手札破壊系のカードを引けないと負ける——！！

「こつちのもカウンターがなくなったから生贄だね。エンドだよ」

「俺のターン。アンタップ、アップキープ、ドロー……——！！？」

「なにか、いいカードでも引けたかい？」

「ああ、地底の大河2枚から無色2マナ、沼から1マナ——ヨーグモスの意志だ！」

「な、なんだって！？」

「残り3マナ出して、墓地から暗黒の儀式で5マナ、ヒムと拷問の車輪をプレイするぜ。禁止をバイバックしなかったのが仇になったな」

「くっ」

疋田の手札は『補充』と『セラのアバター』、危ねえ……やつぱりいたか。

「手札からセラのアバターが落ちたから加えてデッキを切り直すね」

「俺はエンドだ」

ピンチは凌げたが、騙し討ちを壊す手段がねえ……。

「おれのターンだね。アンタップ前にアンパラが手札に戻ってアンタップ、アップキープに2点ダメージもらってドロー。アンパラをプレイしてエンドだよ」

「……アンタップ、アップキープ、ドロー。島をプレイしてエンドだ」

「おれのターン。アンタップ、アップキープに2点ダメージもらってドロー。島をプレイしてエンドだね」

「俺のターン——」

——足田とのデュエルは俺の負けだった。

3ターン目に衝動を引いて、ヒッピーを一番上まで持ってきたが、足田はこれ以上土地を出す必要がないから、拷問の車輪では削りきれなく、ヒッピーを入れても削りきれなかった。

それで、5ターン目に足田が『ヴォルラスの要塞（コストを支払って墓地のクリーチャーを1体、自分のデッキの一番上に置くことが出来る土地）』を出して、騙し討ちの能力で手札から『無限のワーム』をプレイして即アタック、不毛の大地があればよかったが、引けなかったので俺は投了した。

「うーん、まだまだ改良が必要だね、コレ」

「そうなのか？」

「うん、展開が遅すぎてダメ。もっと、サーチ系とマナ加速のカードを投入しないとね」

「そか」

さて、山本と花のほうはどうなってるかねえ——？

——そこには、真っ白になってるヤツがいた。

「ふっ……真っ白に燃え尽きたぜ」

「あ、優夜。かちましたか？」

「残念ながら負けだよ。花は勝ってるか？」

「……なんで1枚挿しのはずの『赤の防御円』が毎回5ターン以内に出てくんだよ」

さすが花……恐るべきドロー力の持ち主っ！！

「んー？」

「なるほどな……山本は円盤とか樽入れてなかったんだな」

赤単じゃ防御円張られたらほぼ終わるからな。

山本よ……ご愁傷様。

9・カードゲーム対決しよう - 2 (後書き)

青黒ハンデスVS青緑タッチ3色変形スニークアタックでした。

まあ……どう見てもただのファンデッキですね、知り合い同士でデュエルする分には面白そうですが。

あと1話だけMTG関連の話になりますが、デュエルはこの話で終わりです。

カード名やルールなど詳しく知りたい方はMTG Wikiへ。

訂正

剣を鋤に↓剣を鍬に でした。7のほうも後ほど修正致します。

10・カードを買いに行こう

「さて……時間あまつたな？」

携帯の時計を見ると午後3時ジャスト、このまま解散してもいいが、もう少し何かしたい気分だ。

「んじやさ、折角集まったんだしゲームショップいかな？ それぞれ足りねえカードあんだろ？」

ナイスタイミング、山本。

「俺は賛成だ。正田はどうするよ？」

「うーん、おれも賛成だけど……花ちゃんどうすんのさ？」
と、正田が花を見る。

「んー？ 花ですか？ 優夜たちはどこにいくんですか？」

「近所のゲームショップに行くんだよ。花も来るか？」

「んー……優夜が行くなら花も行きます」

「よし、決まりだな！ 早速行こうぜ！！」

がやがやと騒ぎながら外に出た俺達はチャリに乗り始めた。

「チャリでいくからな。花はここに乗って俺をしっかりと掴んでろよ？」

「はい、優夜」

ぎゅうううー……—

「いででででっ！？ 誰が胸締めしろって言った！？ もっとソフトに頼むな……」

「んー？ こうですか？」

ぎゅー——

「ああ、そんな感じでな。よし、行こうぜ！」

「おう！」

チャリで坂道を駆け下りると、涼しい風が顔に当たって心地いい。
「風がきもちいいです」

「今日は涼しい風が吹いてるからな。外出にやもってこいだな」

「はい、花もそうおもいます」

「しっかし……高岡と花ちゃんは今ホント仲いいよな」

山本が手放し運転しながら言う。

手放し運転は大変危険ですのでやめましょう。

「そうかあ？ これくらい、従兄妹なら普通だろ？」

「はい、優夜と花は仲良しさんです」

ぎゅう——

「ははは。ま、仲が良いのはいいことだよ」

——と、盛り上がっていたら、いつの間にか店の前に着いていた。
花を後席から降ろして、3人で店の中に入る。

「ちわーすっ」

俺が挨拶すると、珍しくレジ前にいた店長がありがたいお言葉で
出迎えてくれた。

「おう、いらっしやい。何だ、おめえらか」

それが客に対する言葉っすか、店長……。

この、熊のようなガタイをした男がこの店の店長で、どう見ても
どっかのプロレスラーにしか見えないが、気さくな態度で周りのガ
キ共からは人気があった。

ゲームシヨップだがカードも取り扱っていて、小さいが奥にデュ
エルスペースもあるが、店長いつもそこにいるからレジがら空き
なんだよな……大丈夫なんかね？

「ん？ 今日は、随分と可愛い嬢ちゃん連れてるじゃねえか」
「ひっ」

花に気づいた店長が目線を花に向けたが、体つきと顔が怖かった
のか、すぐ俺の後ろに隠れてしまった。

「店長……あんま脅かさないでやってくださいよ。コイツ俺の従兄
妹っす」

「こわいです……くまさんみたいです……」

「別に脅かしてるつもりはねえんだがな……悪かったな、嬢ちゃん。おめえらと一緒にいるってことは嬢ちゃんもやれるのかい？」

あなたが言うとは別な意味にしか聞こえないのでやめてください……

…

「デッキはまだないっすけどね」

「そうかい。ま、買ってくんだろ？好きなだけ選んでいつてくれや。何なら俺が選んでやつてもいいぜ？」

「……オレがこの前第5版買ったとき、店長が選んだヤツ」にやにや笑いの「トーテム像」でしたよね？」

あ、山本がその時のことを思い出したのか、苦虫を噛み潰したような顔になつてら。

それから、山本と疋田は『テンペスト』と『ウルザズ・サーガ』、『ウルザズ・デステイニー』を何パックか手にとっていた。

「優夜は、どれを買うんですか？」

ようやく、恐怖から立ち直ったらしい花が俺の上着の裾を引いた。

「どうっすかなあ」

「お、そういえばお前さんがヒム足りないと言ってたから、『フオールンエンパイア』も入荷しておいたぞ」

「お、助かります店長。それ1パックください」

「あいよ、2500円な」

「……定価の10倍じゃないっすか」

「冗談だ。他はどうすんだ？ また『リバイズド（第3版）』いつてみるか？」

そう言つて、店長は1パック1500円を取り出そうとしたが、

「今日はやめときます……」

俺は辞退した。

両親の仕事の関係で小遣いは並以上にもらっているが、ダチと遊ぶときは皆と合わせている。

コイツらは気にしないだろうが……これは俺の気持ちの問題だ。

「そうかい。ま、好きに選んでくんな」

悩んだ結果、俺はテンペストとウルザズ・サーガを3パックずつ選んだ。

——が、最後の1パックが決まらない……お、そうだ。

「花」

「んー？ なんですか、優夜？」

「この中から、1パックずつ選んでくれないか？」

「んー？ じゃあ……これと、これで」

「ありがとよ。店長、これとフォールンエンパイア1パックください」

「あいよ」

金を払って、お楽しみの開封タイム突入っ。

「げー、カスレアばっかだよ……正田はどうだった？」

山本が、がっかりしながら疋田に声を掛ける。

「んー、『反射池』だけかな。後はハズレだったよ」

まさに、悲喜交々である。

「いいモン引いてんじゃねえか……高岡は？」

「俺か？」

山本に言われて俺もお楽しみタイム突入。

まずはフォールン・エンパイア……お！ ヒムが入ってる、これで4枚揃ったな。

お次はテンペストとサーガを2パック……うーん、微妙だな……。

あとは、花が選んでくれたヤツか……どれどれ——

「ぶっ——！」

「ど、どうした？」

「なんかいいもの引いた？」

思わず吹いてしまったので、皆の視線が俺に集まってしまった。

だって、仕方ないだろう？

パックの中に入ってた、魔術師が巻物を開けて驚いているような絵のこれは紛れもなく……

「か、カスコだ」

『な、なんだって——！？』

花……すげえ恐ろしい子っつ……！

「嬢ちゃんすげえな……」

「んー？ 花、優夜のおやくにたちましたか？」

「ああ、ありがとよ、花……」

「んー……えへへ」

サーガのは微妙だったが、カスコが手に入っただ——大した問題じゃない。

花が凄く嬉しそうにしていたので、俺は暫くの間その頭を撫でてやったのだった。

10・カードを買いに行こう（後書き）

カスコ高かったですよねえ……地元でも1枚4000円近かった記憶があります。

MTG編はこれで終わりです。優夜達のデッキは財力が足りない高校生らしく大分ヨタったもの（その割には高額カードが多いんじゃない……という突っ込みはナシの方向で）にしました。コンベや大会では到底通用しません。

次回からはまた、優夜と花の日常編に戻ります。

11・高い所から景色を見よう

「んー、今日もいい天気だなあー」

「ですねー。せっこうのさんばびより、ですね」

今日は土曜日、俺は花と街中を歩いていて。

特に用事があるわけでもないただの散歩だが、これがまた楽しい、いい運動にもなるしな。

「そうだなー。花はどこ行きたい？」

「んー？ 花は高いところからけしきを見てみたいです」
ぼん、と手を叩く花。

「高い所、ね……」

この辺で高い所だと……あそこしかないな。

「じゃ、あそこ行くか？ ここから見える三角の建物」

俺は、正面に見える灰色に塗られた三角の建物を指差す。

「はい、優夜がいくならいきます」

いや、花さん？ アナタが行きたい場所を聞いているんですが？
まあ、いいか……「こまけえことはいいんだよ！」ってえことで

……。

「行くか？」

「はい」

暫く、花と他愛もない話をしながら歩いていると、目的に近づくにつれて独特の匂いが漂ってきた。

海の——潮の匂いだ。

「んー……海のおいがします」

「ああ、すぐ後ろに海があるからな。釣りも出来るぞ？ 今度やってみるか？」

「んー？ 釣りって……サムネやタイトルでしちよう者を釣——」

「その釣りじゃねえ！ 真つ当な魚釣りだよ！！」

サムネやタイトルを餌にして魚が釣れるかつ！！

……視聴者という名前の魚なら釣れるかもしれないがな。

「んー、魚釣りでしたか。花は生ぐさいのあまり好きじゃないので遠りよしておきます」

「そうか」

そうこう言ってるうちに入口に着いた。

「わ、高いですねー」

「ここの7階だったかに展望室があるんだ。早く行こうぜ」

「はい」

「花はエレベーター乗ったことあるか？」

「えれべーたー、ですか？ ないかもしれませんが……」

エレベーター乗ったことないのか……。

しかし、7階の展望室には階段ではいけないからな……6階まで階段使ってそこからエレベーターでもいいが、無駄に疲れるのも嫌だ。

仕方ないな……。

「そか。慣れないと酔うかもしれないねえからな、気持ち悪くなったらすぐに言えよ？」

「はい……優夜」

花の手を引いてエレベーターに乗る。

重力が掛かると浮遊感で気分が悪くなる人も多いと聞くが、花にそんな様子はなく——エレベーターから見える景色に見入っていた。

そして、あっという間に7階に着いた。

「ほれ、着いたぞ」

「わあ……っ」

花はエレベーターから降りた途端に、ドーム状の展望室から見える景色に目を輝かせて駆け出した。

ここだけ見ると、年相応の子供だな。

「優夜優夜っ、海が広いですっ」

「ああ、広いな」

「あつ、あそこに船が見えますっ」

「あれは、北海道行きのフェリーだな」

「そうなんですかー。あつ、こっちから見るとまちがあんなに小さく見えますっ」

「ははは、そうだな」

「んー？ 優夜は何をわらっているんですか？」

花が首を傾げながら俺を見上げる。

「いや……花は高い所が好きなのか？」

「ちがいます。花は高いところが好きなのではなく、高いところから見るけしきが好きなんです」

「そうなのか。じゃ、こうしたらもっと高くなるな」

俺は、こっそりと花の背後に回って体を持ち上げてやった。

「え？ ひゃっ……お、おろしてください！」

「ほーら、高い高い」

赤ん坊をあやすように俺。

「花はもうそんな年じゃありません！ おろしてくださいっ！」

「はははっ」

マジで怒っているようなので降ろしてやった。

「むーっ、優夜のばかばか！」

花がむくれ顔を赤くしながら、俺の背中をぽかぽかと叩いてくる。当然痛くなんかなくて、むしろ心地いい強さだ。

「悪い悪い。花が可愛かったからつい、な」

笑いながら花の頭を撫でてやる。

「むーっ！」

暫くの間、花は機嫌悪そうにしていたが、近くにあった双眼鏡を覗かせてやると、また目を輝かせてはしゃぎ始めた。

こついうところは単純で可愛いんだがな――

——夕方の帰り道。

「今日は楽しかったか？」

「はい、楽しかったです」

うちのお姫様は大変満足されたようだ。

「そりゃ良かった。今日の晩メシは何かリクエストあるか？」

「んー……花はハンバーグが食べたいです」

ハンバーグ、ね……最近あんま肉食べてないからちょうどいいな。

「よし、ハンバーグだな。材料買って帰るべえ」

「はい、優夜の手料理はどれもおいしいので楽しみです」

「ありがとよ。それじゃ、とびつきり美味しいの作ってやるからな
！」

夕焼けの中を花と喋りながらゆつくりと歩く。

沈みかけている陽に見送られながら、俺と花は近くのスーパーに向かったのだった。

11・高い所から景色を見よう（後書き）

「優夜、世の中には『のーろーぷばんじー』って遊びがあるらしいですよ?」

「それ絶対遊びじゃねえから!」

12・変な図書館です

こんにちは、花です。

花は今……優夜といっしょに『図書館』というところに来てます。なにやら、優夜が調べ物をしたいらしいので花もついてきました。それはいいのですが……。

「んー……花はひまです」

優夜は、なにやら真剣に調べ物をしてて相手にしてくれませんか、いちど少し大きな声で話しかけたら……まわりの人たちににらまれてしまいました。

というわけで……花は今とてもひまなのですが、ここは図書館なので本を読むことくらいしかできません。

なので、花も本を読むことにしましょう。

「んー……」

困ったことに、どれが花が読める本なのかわかりません……。とりあえず……てきとうに手にとってみることにします。

「――！！」

ひっ！　なんだかよくわからないものがなまなましく写ってます――！！

こ、これは花が見ちゃいけない本みたいですね……ぶるぶる。

よく見たら表紙に『図解で学ぶ悪魔』って書いてあります……悪魔さんの本だったんですね。

ちがうのにしましょう。

「……！？」

うつ……こんどの本はなにか内ぞうつぱいものがたくさん写ってます……きもち悪いです。

こ、これも花が見ちゃいけない本みたいですね……がくがく。

よく見たら表紙に『ドクタイシイと愉快な人体解剖』って書いてありました……お医者さんの本だったんですね。

もっと、分かりやすい本があるところに移動しましょう。

とてとて……

「この辺でしょうか？」

それっぽい表紙の本がたくさん見えますので、この辺がよさそうです。

とりあえず、てきとくに1さつ取ってみます。

表紙には『桃太郎・改』と書いてあります、少し読んでみることにしましょう。

『むかーしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがすんでおりました。

ある日、おじいさんは山をしばきに、おばあさんは川へせんたくにいきました。

おばあさんが川でせんたくをしていると、川上から大きなものがどんぶらこーどんぶらこーとながれてきました。

おばあさんは、「あんれまあ、これまた大きいものだこと。おじいさんに見せるんべ」といって川からおおきなものをかたてでつかみあげました』

「……」

なにか、ところどころおかしかったような気もしますがもう少し読んでみます。

『おばあさんがいえにかえると、すでにおじいさんはかえってきていて、せつせとぶーときゃんぷをしていました。

おばあさんが「おじいさんや、おおきいものをひろってきたのでたべましょう」といいましたが、おじいさんは「せいよくをもてあます」といい、おばあさんにちかづきました。

おじいさんがおばあさんにおおいかぶさり、おばあさんのあついいきが——』

「~~~~」

ぜ、絶対これは桃太郎じゃありません！

桃太郎はこんな……いか……いかがわしい本じゃなかったはずで
すっ！！

「あら、どうしたの？」

「はい？」

とつぜん上から声が聞こえてきたので、かおを上げるとそこにお
姉さんがいました。

受付の人と同じ服をきているので、おなじ図書館の人のようです。
「そこは、童話をアレンジしたものを置くコーナーだから、あなたが
読みたい本はその隣のコーナーね」

お姉さんが指をさしたほうを見ると、そこに花くらいの子がよく
読むような本がたくさんありました。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

そう言って、お姉さんは向こうに歩いていきました。

「これにしましょう」

ねんのため、表紙もかくにんしましたが今度は大丈夫みたいです。
花はその本をもって、子ども用の椅子に座って本を読みはじめま
した。

「——きろ。花、起きろー！」

「う……んう？ 優夜……？」

「なんでこんなところで寝てんだ？ もう終わったから帰るぞ」

「あ、はい」

花は、いつのまにかねてしまっていたみたいです。

まだねむい目をこすりながら、優夜の後ろをついていきます。

「花、どうだった？」

「んー？ なにがですか？」

「この図書館」

「んー……へんな図書館です」

へんどころか、へんが4つくらい付くような図書館だと花はおもいます。

「は？　なんだそりゃ？」

「ふふふー」

花は少しわらって、あたまの上にはてなをつかべている優夜のうでにだきつきました。

やっぱり、優夜といるのが一番楽しいです。

12・変な図書館です（後書き）

まさに誰得な桃太郎ですね。

13 近所の公園で涼もう

「んー、とっても涼しいですね、優夜」
「だなー」

今日は日曜日、俺と花は近所の公園に涼みに来ている。

家の中より外のほうが涼しい、こんなに風が涼しい日は外に出るに限る。

「みーんみーんみーん……」

暇なのか、蝉を真似をし始める花。

「ははは、蝉はまだ土の中だぞ？」

「みーんみーんみーん……」

「はあー、平和だねえー」

ホント、平和だねえ……。

こうしていると、世界のどこかで戦争が起きてるなんてことは忘れちまいそうだな。

「みーんみーんーだーはー」

……— 眠々。破か？

「……飲みたいのか？ 花」

「いえ、それほどでも？」

「そか。アレだけはやめとけ……飲み慣れてねえとマスターリバーすだからな」

「ますたーりばーす？」

おや、動画やネットの用語に詳しい花さんが珍しいですな。

「ゲロを吐くことだよ」

正式には吐符「マスターリバー」らしいが、そんなことはどうでもいい。

「そうなんですか。分かりました、みんなだは？だけは飲まないようにします」

「賢明だな。あれはマジでヤバイ……」

以前、徹夜した時に飲んだが……確かに2時間は眠気のネの字すら吹っ飛んだが……その後の反動で強烈な眠気はするわ、腹具合はおかしいわ、拳句の果てにマスターリバーするわで散々だった……もう二度と飲まねえええ！！

「ふう、本当に風が気持ちいいですねー」

「ああ、気持ちいいなあー」

涼しいな、嗚呼気持ちいい、風が吹く――

何故か出来損ないの川柳みたいになったが、それほど気持ちいいってことだ。

とはいえ、少し喉が渴いたな……近くの自販機で何か飲むか。

「花、ジュース買ってくるけど何飲むか？」

「んー？ じゃあ、花は……タ。クリアがいいです」

「ライ……それも売ってねえよ！！」

「えー……じゃあ、ステ。アかポカリをおねがいします」

「あいよ」

ス。ビアももうねえだろうが、ポカリは確実にあるだろ。

自販機に着いたので金を取り出す、500円玉を入れる前にチラツと売ってるモノを見てみたが――

「……メッコ。ル、ステ。ア、タブ。リア、カ。エコーラ、ペプ。しそ味、炭。文明、シユールs――なんだこりゃ？」

……キワモノか絶滅種か絶滅危惧種ばかり売ってるように見えるんだが……気のせいかな？ 最後のは飲み物ですらないと思うが……。もちろん、普通のコークやポカリも置いているには置いているんだが、圧倒的に数が少なえ……。

「俺は、メッ。ールにするか。花はポカリだな」

メッコ。ルは隣の国のコークで、評判は良くないが俺は嫌いじゃない。

花のは……ス。ビアだと賞味期限がヤバそうだし、普通のポカリにした。

「ふー」

ベンチに戻ると、花は暇そうに足をぶらぶらさせていた。

ん？ 公園とベンチ……いや、何も言うまい。

「あ、おかえりなさい。優夜」

「ああ、ただいま。ステ。アはなかったからポカリな」

「はい、ありがとうございます。優夜……？」

「ん？ どした？」

花の視線が、俺が手に持っている細い缶に集中する。

「そんな飲み物で大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「……」

「……」

「……ふふふー」

「ははは。ま、早く飲もうぜ」

「はい、ごくごく——」

俺も座って缶のプルタブを開けて一気に飲む。

コーク系は一気に飲むのがマイジャステイスだ。

……意味わかんねえ。

「んー？ なんだかねむくなってきました……」

「寝てもいいぞ、いい時間になったら起こしてやるからな。ほら、

ポカリこっちによこしな」

「はい、それじゃ……おやすみなさ……い——すやすや」

俺の太ももの上に頭を乗せた花は、よっぽど眠かったのか、すぐに寝息を立て始めた。

俺は、なんとなくその髪を撫でてやる。

「ホント、いい風だよなー」

涼しい風を感じてるうちに俺もなんだか眠く……まぶたが落ち——

「——んー？ はっ！？ 優夜優夜！ 起きてください！！ もう夜ですよっ！？」

「んー——……何イ！？ しまった！ 俺まで寝ちまつてたのかわいっ！？」

俺達2人ともアホの子でしたとさ……めでたしめでた——くねえわいっ！！

13・近所の公園で涼もう（後書き）

自販機に売ってたシユールsは開けるとヤバい缶詰のことです（汗
11から15は所謂お出かけ編なので、どれも外に出た時のお話になります。

14・買い物に行こう

「花ー」

「はい？ なんですか、優夜？」

「花は夏服持つてるのかー？」

「夏服ですか？ んー……花が持ってきたのは春用のお洋服ばかりですね」

春用じゃ夏だと少し暑いかな……ちょうどいいな。

「そか。んじゃ、買いに行くか。俺もちょうど夏用の服欲しかったしな」

「はい、分かりました」

「よし、さっさと行くべ」

「はい。あ、優夜？ どこに行くんですか？」

「近所のは微妙だから、デパートだな」

面白い服なら置いてるんだが、俺も花も普段着にしていいたいような代物じゃねえしな、アレ。

「分かりました。それじゃ、したくしてきますね」

「おう」

あらかじめ着ていく服を選んでいたのか、花はすぐに降りてきた。何でそれにしたかは知らないが、文字Ｔシャツは別として……水玉のふんわりスカートとポーチは実にそれらしく、お子様らしい格好だった。

文字Ｔの『裏路地』には突っ込んだほうがいいんだろうか……？

「どうですか、優夜？」

花がファッションショーのモデルのように、その場でクルリと一回転してみせる。

「あ、ああ……似合ってるぞ」

とりあえず、花から目を離さないようにしよう……マジで裏路地

に連れてかれかねんわ……色々な意味で。

「んー？　びみょうに目が泳いでた気がしますすがありがとうございます？」

さすが花……鋭いな。

「俺も準備オーケーだ、いこべ」

「わ、大きいですね」

「ああ、この辺じゃ一番大きいデパートだな。5階が服売り場だから離れんなよ？」

「はい」

ぎゅー――

「だからって裾を掴むな裾を！　掴むなら手にしてくれな……」

「はい、優夜」

「そう、それでいいんだ。じゃ、5階に行くぞ」

本当はちよい恥ずかしいし、あまり良くないんだが……迷子になられても困るしな。

エスカレーターに乗って5階まで行ったが、花も知っているものだったらしく、エレベーターの時と違ってそれほど騒がなかった。

5階についてすぐ、目的の服屋に着いた。

「ここは隣が子供服売り場になってんだ。俺はこっちで服選んでっから花も選んできな」

「はい、分かりました」

とてとてとて――

「……さて、どれにしようかね」

色々迷ったが、カッターシャツにジーンズと後はTシャツなど無難なヤツを買った。

支払いを済ませて、と……花がこっちに走ってきたが、手に持ってるヤツは……――

「優夜、こんなのはとうですか？」

「……花」

「はい？」

ポカッ！

とりあえず、拳骨を一発くれてやる。

「いたっ！？ たたきましたね！？ お父さんにもたたかれたことなかったのに！！」

「お嬢ちゃんだからさ——って、そんなことはどうでもいいわ！

ガキ用のボンデージなんかどこから持ってきたんだ！？ ああ！？」

「どこっていわれても……その服屋さんにおいてありましたよ？」

「ファイ……ボンデージ置いてる服屋ってどんなンだよ！？

「いいから置いてこい……」

「分かりました」

戻ってきた花が代わりに持ってきたのは、水色のサマーワンピースとちよつとしたパーティにも着ていけそうな子供用のお出かけ服とＴシャツや小物数点……まあ、これならいいだろう。

「それでいいのか？」

「はい、花はこれでいいです」

レジで支払いを済ませて、受け取った袋を花に渡してやる。

「ほらよ」

「あ、ありがとうございます……優夜」

それを大事そうに抱きしめる花。

「気にすんな。次はどこ行くか」

「んー……あ！ 優夜、お人形さんが売ってます！」

そういえば、このフロアには服の他に人形関係の売り場があったな、7階のおもちゃ関係フロアじゃないのが謎だが。

「ん？ ああ、見ていくか？」

「はい、少しだけ……」

少しだけと言いながらも花の目は輝いている。

人形が好きとか、やっぱ年相応の女の子なんだな。

「わあ、かわいいお人形さんがいっぱいです！」

「そうだな……花、俺ン家来てからゲームばっかやってるだろ？」

「買ってくか？」

「ええっ！？ い、いいですよ……安くないですし」

花が慌てて首を横に振る。

「気にすんな。どれだ？」

先日も言ったが、俺は高校生にはあり余るくらいの小遣いを貰っている。

確かに安いものではないが、人形くらいじゃないし、自分の子供にプレゼントをあげると考えれば何の問題もないからな。

……別に子供が欲しいわけじゃねえからな？

「そ、それじゃあこの子を……」

花が指差したのは、花が胸に抱いて収まるくらいの西洋風の人形だった。

着ている服がなんとも……花らしいチョイスだな。

「よし、じゃそれ持ってレジ行こうな」

「はい、ありがとうございます……あ、優夜！ これどうですかっ！？」

「ん？ なになに……」

レジに並んだとき、花が妙にはしゃぎだしたのでそれを見てみると――

「――あなたの携帯のバイブレーションに反応してカワイイお人形さんが声を出します、か。面白そうだな、買ってみるか」

「はいっ、花もおもしろそうだとおもいます」

機能もそうだが、雑な作りだがシンプルな人形が気に入った！

男の持ち物じゃねえが、気にするほどのことでもねえだろ。

代金を支払って早速携帯にストラップを通して人形を付けてみる、花は花で大変ご満悦のようだ。

「さて……そろそろ昼だし、メシにするか。花は何が食べたいんだ？」

「んー？ 花はなんでもいいです、優夜におまかせします」

「そか。じゃ、とりあえず――」

8階の食事処フロアに行こうとしたら携帯が震えてどこからか声が聞こえてきた……が――

『オイ、メールが着たぜ』 ↑とても汚い声

…… あん？

「花、何か言ったか？」

「んー？ いえ、花はなにもいってませんよ？」

だよなあ、てかどう聞いても花の声じゃなかったしな……。

『オイ、メールが着たぜ』 ↑すごく汚い声

…… また聞こえてきたぞ。

「さつき、なんか変な声が聞こえなかったか？」

「優夜もですか？ 花もなんか変な声きました……」

『オイ、メールが着たぜ』 ↑のれそれ汚い声

「…… もしかしなくても、これか？」

携帯に付けた人形を確認してみる、ゴノレゴよりも酷い声がソレから出ていた……。

「そうみたいです。少しがっかりです……」

「だな…… まあ、これはこれでいいか」

人形自体にもマナーモード機能が付いてるし、声を除けば悪いものじゃないしな。

その後、俺と花は8階のレストランで楽しく喋りながら、景色を眺めながら昼飯時を過ごしたのだった。

——帰宅後のお話。

「さあ、今日からあなたは花の家族ですよー、臓物太郎」

「オイイ！ 今シヤレにならん名前が聞こえたんだが！？」

「んー？ いけませんか？ じゃあ……髑髏吉右衛門で」

「却下だ！ というか、なんで男みたいな名前なんだよ！？」

「んー……じゃあ、臓物腐乱子で」

「いい加減臓物から離れろっ！！」

残念！！ 花のネーミングセンスはゼロだった！！

14・買い物に行こう（後書き）

文字T面白いですね、良いものがあつたら着たいところです。『淫乱』とか『肉奴隷』とか（噓

花の人形はドールリケのDタイプに近いものになります、それより少し大きめですが。

というか、『のれそれ』って一般の人分かりませんよね？（汗

15・田舎でのひととき

——ああ、なんて静かなんだろうか。

小鳥のさえずり、虫が奏でる音はあるが、街にはない静けさがある。

水を一口飲む……家のとは比べ物にならん良い味だ。

「あはは！ 優夜ー！」

こっちに手を振っている花に手を振り返してやる。

花は、今までにないくらいの満面の笑顔で、木にとまっている虫を眺めている。

あ、花の周りを飛んでいる蝶を追いかけてった、平和だねえ……。

「優夜や、西瓜切ってきたんばってくだな？（優夜、西瓜切ってきたんだけど食べるか？）」

「ああ、いいな。いただくよ、婆ちゃん」

婆ちゃんから受け取ったスイカを一口齧る。

うん、季節的にまだ早いからそれほど甘くないかもしれない思ったが、十分に甘い。

「甘くて美味しいな」

「んだな？ いがったいがった。お代わりはまだまだあるはんで、ずっぱどけの（そうか？ よかったよかった。お代わりはまだまだあるから、いっぱい食べてな）」

「ああ、遠慮なくもらうよ」

婆ちゃんが渡してくれた、ふた切れ目のスイカにムシヤムシヤやりながら花を見る。

——俺達は、土日の連休を利用してお袋方の爺ちゃん婆ちゃん家に避暑もかねて遊びにきていた。

こっちのほうか山に近い分涼しくて、夏の間は過ごしやすいからだ。

冬になると寒さが堪えるが、それでも雪かきや雪遊びが楽しめる

ので悪いものじゃないが。

親父のほうの実家にも行きたいところだが、少し遠いので夏休みとかのほうがいいだろう。

「優夜や、望美や茂は元気さしてらな？（優夜、望美や茂は元気にしてるか？）」「

「ん、親父とお袋か？」

「んだ（そうだ）」

「お袋は分かんけど親父は元気そうだったよ。この前、花のことで話したけどさ」

「んだな。まったく、茂もたまさは、電話の一本ぐれ入れろ、どかつちやがへってたって伝えてくれな？（そうか。まったく、茂もたまには、電話の一本くらい入れろ、と母が言っていたと伝えてくれるか？）」「

「ははは、言っておくよ」

「お願いすら（お願いするわ）」

婆ちゃん、そのまま視線を花に向ける——俺も釣られて花を見る。

花は、まだ花の周りの蝶と戯れていた。

「花ちゃんの……茂はあのわらしば何んぼすらつもりなのかきや……

…（花ちゃんか……茂はあの子とどんな感じで知り合ったのかね……

……）」

花を見ている婆ちゃんの目がわずかに細くなる、怒っているのか？

いや、違うな……親父が何を考えているのか分からないだけだ。

幾ら親子といえども、数年も会ってなければ勘や諸々も鈍るというものだろう。

だが、俺は——

「俺も、親父が何を考えているかは分かんねえけど、あいつを不幸にするためとか……そういうのじゃないのは確かだと思うんだ」

「んだか？ わさはよくわがねが（そうか？ 私じゃよく分からないが）」

「俺も、よくは分からねえよ。ただ、花の表情を見てるとそんな気がするんだ」

俺は、ただ楽しそうに蝶と戯れる花を見る。

——俺の家に来たばかりの花は、表情の起伏がとても少ない女の子だった。

それが、山本や疋田達と出会い、遊び——様々な場所に出かけるようになってから、こんなにも表情を表に出すようになった、それは……とても良いことじゃないか。

親父が何を考えているかは早めに知りたいが、そこまで慌てることもない、と俺は思っている。

「……優夜がへるんだばんだべな。だば——（優夜が言うならそうなんだろうな。では——）」

婆ちゃんはずくと立ち上がって、

「花ちゃんやー！ 西瓜あるはんでかなー！（花ちゃん！ 西瓜あるから食べなー！）」

70近いご老人とは思えない大きな声で花を呼んだ。

「あ、はい！ 今行きまーす！」

いつものトテト走りでこっちに向かってくる花。

思うんだが、あの走り方でよくコケないと感心するわ……。

「優夜んど今日はうちさ泊まっていくんだべ？ だば、わは先に入っ中に入ってまんま作らないとだの（優夜達、今日はうちに泊まっていにくんだろう？ なら、私は先に家入って夕飯作らないとな）」

婆ちゃんと入れ替わるようにして、花が俺の前に駆け寄ってくる？

「はあはあ、お待たせしました。あれ？ おばあちゃんはどこへ？」

「メシ作るからって花と入れ替わりに家ン中入っちゃったよ。今日のメシはきつと豪勢だから楽しみにな！」

「えー、がっかりです……花もおばあちゃんとお話したかったのに……」

がつくりと頭を垂れる花を、俺は苦笑しながらも軽く撫でてやる。
「なにしょぼくてんだ、メシの後に幾らでも話せるだろ？ うり

うりー」

くしゃくしゃ――

「わ、なにするんですか、優夜！ やめてくださいー！」

「はっはっは！」

「うー……花の髪がぐちゃぐちゃになってしまいました！ 優夜っ、
ばつとして花と遊んでくださいー！」

「はいはい、仰せのままに。お姫様」

わざとらしく恭しい態度を取る俺。

「むーっ、なんかくやしいからこうしてやります！」

むにーっ！

「イテテテッー！」

コラッ！ ホッペを引っ張るなっ！

「これくらいでゆるしてあげます」

「痛ってえな……」

さすが花、ホッペが千切れるかと思ったぞ……すぐに解放しても
らえたが痛みは暫く続きそうだ。

「ふう、すつきりしました。さあ、優夜。花と遊んでくださいね」

「ああ。なあ、花？」

俺は立ちあがって花を見る。

「はい？」

「ここは楽しいか？」

俺の問いに花は――

「――はいっ！」

夕日に照らされる花々に負けない笑顔で頷き、俺の手を引いて花
畑に走り出す。

日が暮れて、婆ちゃんが呼びに来るまで俺達は遊んでいた。

――この後の夕食時、仕事から帰ってきた爺ちゃんが花をえらく

気に入ってしまった勢いで酒を飲ませて、そのときにまた一騒動あったんだが……それはまた別の機会に語るとしよう。

15・田舎でのひととき（後書き）

えー、作中の津軽弁ですが……突っ込みはナシでお願いします（汗
一応私と面識がある方々のを参考にしていますが、北津軽弁と弘前津
軽弁が混じってます。あと、表現できなかった箇所もありますので
そこも少しおかしくなっているかもしれません。

というか、自分の出生地の方言とはいえ、こんなに難解だとは思
いませんでした……。

何はともあれ、これでおでかけ編は終了です。

今回は少しお待たせしてしまっすみませんでした。

16〜20は多分、花が興味を持ったものに関することを書いてい
くと思います。

よろしければ、引き続きお付き合いくださいませ。

16・花と時代劇

「ただいまー」

……ん？ 今日はずかだな。

というより、いつもならトテトテとやってくるはずの花が来ない

な……むっ――

「……蜜柑？」

シユルルと飛んできた物体を掴んでみれば、それは酸っぱい夏の蜜柑。

てか、食べ物を粗末にしちゃいけません！

む？ 花のヤツ、あんなところに隠れてやがる……バレバレなんだが何してんだ？

「……」

テレビの音が聞こえるな……これは――ははあ、そういうことか。

ま、合わせてやるか。

「――むっ！ 何奴！？」

悪役っぽい声色を作って、蜜柑が飛んできた方向に目を向けてやる。

ゆっくりとガラス戸の横から登場する花、威厳を見せるようにやつてるんだろぅが絶望的に似合ってるねえ……。

「ぷっ！」

「な、何がおかしいんですかつ！？」

「悪い悪い。それより、次は花の台詞だぞ？」

「あ、そうですね。えーと……おろかもつ！ 余の顔を見忘れましかつー！」

無理矢理繋げるな……しっかし、ホント似合わんよな……こんな可愛い上様どこにもいねえって！

「余？ 余じゃと……はっ！？ そのお顔はまさか——上様じゃ！
？ ははあー！！」

とりあえず口だけ言っとくか、花も気にしてないようだしな。

「高橋屋優夜乃彦左衛門、そのほう……えーと……んー……何にし
ましよう？」

「ズコーッ！」

「んー？」

思わず口に出しちゃったじゃねえか！

「ああ、罪状か？ 別になんでもいいんじゃないか？」

「そうですか？ じゃあ……そのほう、きのう花のラムレーズン・
アイスを食べてしまった罪、断じて赦せません！ いさぎよく腹を
斬りなさいっ！！」

軽犯罪以下で切腹だった！ つか……—

「罪をでっち上げるな！ 昨日アイスなんてどっちも食べてねえだ
ろが！！」

「えー、なんでもいいって優夜言ったじゃないですか」

「そりゃ、言っただけどよ……実際ある罪にしるよ！」

「むー……^{アマツコ}優夜ならやりかねないからこれでいいんですっ！」

この女、あとでシメてやろうかい！？

……まあ、いいがな。

「チッ、しゃーねえな。う……上様が、かような場所に来られる筈
がない！ 者ども、出あえ出あえい！！——此奴は上様の名を騙
る偽者じゃ！ 斬れい！ 斬り捨てい！！——と続くんだが2人
しかいないから無理だな、時代劇見てたのか？」

「おかえりなさい、優夜。はい、今ちょうど『暴れん。將軍拾』が
再放送されていたので」

「ただいま、花。ああ、暴れ。坊將軍拾か。確か……シリーズ最終
だったなー」

結構好きだったんだが、長すぎてネタ切れしたのか、それとも何
かのイザコザがあったのか知らんが明らかにおかしい終わり方した

シリーズだ。

つか、花時代劇好きだったのか……食玩の件といい、ホント趣味が渋いよな、花は。

「これから『必殺。事人弑』やるみたいです。優夜もいつしよに見ませんか？」

「お、いいねえ。じゃ、俺は茶淹れ直すわ。渋い番組には渋いお茶、だろ？」

「いいですねー。花は番茶でおねがいします」

「あいよ。俺も番茶にしようつと」

「ごそごそつと、番茶の葉っぱあつたつけなー。」

——その後、見終わって。

「よし、明日は『殺しの場面』で優夜をむかえてあげますっ」

「マジで勘弁してください……」

はぁ……また明日も似たようなモンやるのかよ……。

そう溜息を吐きながら、少しげんなりしている俺だった。

16・花と時代劇（後書き）

「次から『小さな暴れん坊將軍』が始まります」
「嘘だっ！！」

今回短めです、4以来の3kb以内だったりします。

17・花とレトロゲーム

「うーん、これはちょっと難しそうです……」

インターネットで見つけた解説サイトを見て、花は首をひねります。

今日は平日です、優夜は学校に行っていて、お外の天気もあまりよくないので、花も優夜のパソコンで遊んでいます。

「んー、まあ……難しいほうがおもしろいですし、これにしましう」

エミュ——正式にはエミュレーターというらしいです——を立ち上げて、目的の“ろむ”を選びます。

このあたりの操作は、優夜がいない間に何度もやっているのですが飯前です。

……あれ？ 朝ご飯前でしたっけ？ んー……気にしても仕方ないですね、ゲームを始めましょう。

「んー？ このこうもりさんはなんでしょうか？」

花が操作する青いナイトつばい人の前を黒いこうもりさんが通せんぼしてます。

じーっと見てたらばさばさところちに向かってきて、体当たりされたらダメージを受けてしまいました。

このこうもりさんは敵のようですね、剣で倒したらコインが手に入りました。

「あ、宝箱があります」

どうやら、剣でつつくと取れるみたいです、取ったら体力が少し増えました。

このサイトによると、一つ上の階にある“あろー”という武器を取らなければいけないようですので取りにいきましょう。

「わ、石がふつてきました！」

この石も敵みたいですが、剣でつついてもキンッて音がするだけでダメージを与えられません。

左に上に行く階段があるみたいなので、とりあえず石は無視しましょう。

「がい骨さんがうろろろしています……」

剣を持ったがい骨さんが行ったり来たりしてます。

ためしにドア越しに正面からつついてみましたが、何も変わりありません……あ、もしかしたら――

花の予想通り、背中からつついてみたら3回で倒せました。

3回つつかないと倒せないみたいで、1回や2回だとすぐに復活してしまいました。

「あ、この宝箱ですね」

上いってから下に降りたところにありましたが、ここも石がふつてくるのでささと宝箱を取ってスタート地点に戻りましょう。

“あろー”で遠い敵に攻撃できるようにりましたが、そのかわり1回使うごとに上の矢つつが1個減ってしまうみたいです。

「さて、いよいよですね……」

取れるものはぜんぶ取りましたし、“ワールド1”というところに行くことにしましょう。

がい骨さんとすぐかたい風船を何体か倒して、ほこらに入ります。

おじいさんと会話して移動した先は、森のようなところでした。

「んー？ えーと……まずコインを集めないといけませんね」

コイン20まいで買える武器が必要で、それを買わないと先にすすめないようです。

ですので、まず敵を倒してコインを集めます……岩っぽい敵よりおおかみさんのほうがコイン落とすみたいなので、そっちに移動しましょう。

倒し終わったらほこらへ、出たらまた倒すを繰り返しているうち

にコイン20まいになったので武器を買いました。

「おー、これでブロックこわせるんですね！」

ブロックをこわせるようになったので先に進みましょう。

先を進むと大きな水たまりが見えてきましたが、この先には足場も何もなく進めないみたいです。

試しに水の中に入ってみましたが、すごいきおいで体力が減っていったので慌ててアイテムで入り口まで戻りました。

青いナイトさんはのこぎり……じゃなくてカナヅチだったのです。

「うーん……どうしましょう」

そういえば、ほこの女神さまが『待っていれば道は開かれる』

みたいなことを言っていた気がします、その言葉どおりに待っていたらブロックが出てきました。

なるほど……これを渡っていくんですね、落ちないように慎重に、慎重に……

「んー？ あやしいですね……」

無事水たまりを抜けて、先を進んでいたら下におりる穴を発見しました。

先に進むには、ここからおりるしかないみたいですが穴が1マスしかないのがあやしいです。

念のため、ジャンプしながらおりにすることにします。

「よいしょと……」

やっぱり、左に足場がありました。

こうもりさんを倒して、ほこらで少し強いたてを買いました。

これで、敵の飛び道具をはねかえせるようになったはずです。

広い水たまりに落ちないように進んで、鳥さんがいっぱいいるところをぎりぎり抜けて、おさるさんを倒して体力を回復してボスがいるほこらにたどり着きました。

「えーと……出現させるコマンドは確か……」

ぼん、ぼん、ぼん、と――

画面が点めつした後、骨のドラゴンさんがあらわれました。

このサイトによると、“あろー”を頭の角にぶつけられたいみたいです。

「えい！ えい！」

体力があぶなくなってきたので、ピンク色のナイトさんにかわってもらいます。

はしごにのぼっても、飛んでくる骨で落とされてしまうのが少しきびしいです。

「ふう、少し強かったですね……」

なんとか倒すことができました。

落ちてきた宝箱を剣でつくと、また少し体力が増えました、これでワールド2に行けます。

ですが、何かあつては問題なのでここでセーブしておきましょう、便利な機能ですね。

『ただいまー。花ー、今帰ったぞー』

「あ、優夜がかえってきました！」

少し残念ですが、続きは後ですることにしましょう。

がちや！

とてとてとてとて――

「おかえりなさい、優夜っ！」

17・花とレトロゲーム（後書き）

今回は花にとあるレトロゲームをやってもらいました。

何のゲームか分かった人は多分年近いですね。

溶岩とジンジローゲとワールド4BOSSのドラゴンはトラウマです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8934t/>

優夜と花

2011年9月9日03時17分発行